

一九七七年十二月一日第三種郵便物認可

発行所〓社会通信社

発行人〓滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ横ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367
振替〓〇〇一〇〇一〇九一五八四三一 労金〓東京労金本店No1154163

購読料〓月額600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

総選挙の総括にあたって

藤沢 晃……………2

三池炭鉱閉山と三池の労働者運動

宮崎 勝……………3

―働く者の権利を奪う閉山は許せない―

橋本行革是最悪の反動路線

……………6

―反合理化闘争の再構築を―

◇座談会◇

「下から」運動づくり、全階層に切り込む

……………8

―総選挙総括と新社会党の進路(下)―

総選挙闘争をたたかって

……………14

国民が政治の手術を(大牟田)／さわやかに六千六百九十一票(京都)／

三百十一票を土台に(奈良)／若者の心をとらえる(自治労)／党組織建

設に芽(新潟)／労組と選挙、政党支持(協病労組帯広支部)／狸に化か

された総選挙(名寄)／総括の徹底を(兵庫)

編集部だより……………5

『社会通信』本誌の読者をご紹介ください

刊旬 社会通信

NO. 655

一九九六年十二月一日号

一九九六年十二月一日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三回発行)

■巻頭言■

総選挙闘争の総括にあたって

我々が予想したあるいは期待したほど全国的に得票数が伸びなかったのはなぜか

①結党後日が浅く、知名度がなかった（マスコミの無視ないし軽視も原因）。②県本部、総支部等の組織が確立されていない所がまだまだ多い。③労働組合などから排除されて、組織的にもあるいは財政的にも厳しい状況に立たされている。④結果として全国的に候補者を立てることができなかった。⑤民主党の結成や土井たか子が社民党の党首に就任したことによって影響を受けた。

以上が一般的に言えることだが、これだけではなくもう一つ重要なことは、われわれ党員と国民との間の認識に大きなずれが生じていたのではなからうか。党員としては、旧社会党の正しい路線を守り継承しているという自負と、腐っても社会党への支持は存在するという思い込みがあったことは否定しがたい。ところが、国民としては、一八〇度路線を転換した社会党に対しては、怒り心頭で、新社会党も旧社会党と同一視するひとが非常に多かった。

このように今回の選挙では、旧社会党のプラスの面よりもマイナスの面を多く引き継がざるを得なかったのではなからうか。その結果、かつての社会党支持者、特に筋を通す支持者は共産党に行ったり、棄権に回ったと思われる。

新社会党に展望はないのか

全国的には敗北したが、地域によっては多くの票を獲得しているところも少なくない。わが徳島第二区でも、立候補声明からわずか一カ月で二万五四六九票（一三・〇三％）を獲得することができたのである。

新社会党とはどういう政党なのか、どういう政策をもっているのかをきちんと訴える事ができたところは、国民の支持を得ることに一定成功している。反自民・非共産の護憲・革新の政党を望む声は国民の中に確かに存在する。この声をいかに吸収することができるか、われわれ新社会党にとっての大きな課題である。

我々は何をなすべきか

新社会党は正しいことを言ったのにどうして理解してもらえなかったのだろうかと思う人もいるかもしれない。正しいことを言えば自ずから国民の支持が得られるということがいかに幻想であるか。今回の選挙で痛いほど味あわされた。

正しいことを国民に理解してもらうためには力が必要なのである。政党である以上選挙は避けて通れないし、大衆運動も指導しなくてはならない。そのためには「金と手間」がなければ話にならない。とりわけ選挙には費用と人員（党員や支持者）が必要であるばかりか、肝心かなめの候補者を確立しておかないとどうしようもない。レーニンではないが、「常に準備せよ」である。

そうは言っても、今回の選挙で多額の借金を負ったところは大変だと思うが、党員と機関紙の拡大を中心に組織建設に邁進し、いかなる状態でも（風が吹こうが吹くまいが）選挙が闘えるだけの態勢を作り上げるようにしよう。新社会党の政策を国民に理解してもらう最大の機会は選挙だから。

（藤沢 晃）

三池炭鉱閉山と三池の労働者運動

―働く者の権利を奪う閉山は許せない―

三池炭鉱閉山問題が現実味を増してきています。三月初め、合理化による三池三川坑炭じん爆発の犠牲者である一酸化炭素中毒患者・遺族を援護する労使間「CO協定」が、三井鉱山の提案通り破棄されました。マスコミ各社は、協定破棄の問題は「円滑閉山」を進めるための一つの解決策であり「来年三月閉山か」と報じています。

三井鉱山はマスコミの報道に対する具体的コメントはしていないが、三池の現地では、使われなくなった坑口施設（堅坑ヤグラ）や社宅の取り壊しが進んでおり炭鉱マンの間には失業の不安やあきらめが広まっています。

三池炭鉱は九州石炭産業の一大拠点として近代日本の発展を支えてきたといわれてきたが、実態はそうでなく、利潤追求のための合理化により肥え太ってきたという、まさに日本独占資本の搾取の代表であったということができます。

この三井鉱山が、儲けが少なくなれば資本の都合で一方的に閉山し「人間らしく働き続け生き続ける」働くものの権利を奪うものであり、三池炭鉱の閉山は絶対に許せないものであります。

三池労働者運動の継承

三池炭鉱が閉山になれば三池炭鉱労働組合もなくなるだろうといわれています。三池炭鉱労働組合がなくなれば、もちろん三池炭鉱労働運動がなくなります。

しかし、三池炭鉱労働運動がなくなっても三池の労働者と一緒にすすめてきた労働者一人ひとりが「危ない所では仕事はできんぞ、資本の自由にはならんぞ」という思想の強化、労働者一人ひとりの行動をどうつくりあげるかという労働者運動の基盤の上に、三池炭鉱労働組合運動が動いてきました。たんなる指令、指示による動きではなかったと思います。

したがって、三池炭鉱労働組合がなくなっても、三池の労働者がやってきた三池炭鉱労働者運動は引き継がれ残っていきます。また残していかなばなりません。単なる三池の労働者、子弟に引き継がれるというだけでなく、日本全体の労働者、家族に引き継いでいかなばなりません。

閉山問題や労働組合の右傾化、政党の総保守化という情勢のなかであるけれども、ただ情勢がきびしいということだけでは簡単にかたづけられないと思います。われわれが本当に決意し、本当に対応していくという態勢づくりが、目の前に条件としてあると思います。そういう意味で、われわれ労働者階級が中心となって今日の情勢に対応していかなければならないと思います。

みなさんの各職場では合理化が荒れ狂っていると思いますが、それにめげず、労働者の闘う力（資本の自由にならない労働者根性）をどう作り上げていくか、さらには客観情勢にもとづいて、われわれがきちんと対応していかなければならないと思います。

三井の責任追及を闘い続けるCO闘争

三池CO被災者の会三十二名が、和解などいろいろな問題があるにもかかわらず闘い続けられてきたのはなぜかということです。

一つは、三十二名のCO患者・家族が、俺たちは人間らしく生きていく権利があるという意識を、充分でなくとも持ち続けることができた、つまり、なにがあたり前か、なにが間違いか、ということを理解してきました。どうして理解することができたかというとお互い同士や、周囲の人との話し合い、討論が中心ですが、自分の生活実態・職場の実態を常に、「これでいいのか」ということを問い返してきました。それは、どこに間違いがあるのか、どこに不十分さがあるのか、を見直してきたのです。三池でいえば職場・生活の見直しと言ってきました。これが不十分であるけれども「社会の主人公は働く者だ」とまでいかなかったも、俺たちは人間らしく働き続け生き続けることは当然だということに近づいてきたと思うし、このことが三井資本に対する責任追及を闘い続けられてきた一つの原因だと思います。

二つは、闘っているのは俺たちだけではないという認識です。たくさん仲間が支持し支えてくれているという連帯の受け止めかたです。CO被災者の会員の一人がいうには、自分一人で考えているとなにかたまらなくなる。ところが、交流や話し合い（討論）をすることで連帯を感じることができ、勇気が出るといっています。この感じた連帯によって自分の弱さを克服することができたのです。つまり、交流や話し合いのなかで周囲の仲間に関いの理解をしてもらい、同じ見解、同じ要求をもてるようにするからです。

三つは、災害の犠牲をこうむると、家庭生活に変化が起こる、この変化は家庭のなかでお互い迷惑になる、これをほうっておけば家族はバラバラになります。

したがって三十二名は、そうであればあるほど家族ぐるみの団結をつくらねばならない。この家族ぐるみが闘いの支えになってきています。

抵抗なくして安全なし、安全なくして労働なし

つぎに重要なことは三井鉱山の態度ですが、それは判決の軽々しい受け止め方です。それは安全第一ではなく再び生産第一ということです。利潤を上げるために安全が手薄になり、再び災害が起こらないという保障はできない状況であり、再び災害を起こさせないためにも闘い続けなければならないし、本当に責任をとらせていかねばなりません。

そのためには、われわれ一人ひとりの生命がいかに大切か、働き続ける権利がいかに大切であるか、という話し合いをしながら団結を固めねばなりません。

全国の闘いと共闘

CO闘争をたたかっていくためには、全国の労働者との共闘です。CO闘争をどんなに果敢に闘ってもそれだけでは要求は解決しません。全国の闘いと共闘の高まりがCO闘争を前進させるし、CO闘争の前進が共闘を発展させていくのです。この相互関係のなかで発展をつくっていくかねばなりません。それは個別闘争と共闘の関係です。

このことは、国労の闘いについても同じだと思います。国労がどんなに強くても、当局と自民党政府の攻撃に対して国労だけでは闘い続けるのは困難です。

したがって、どう全国の共闘をつくるかということです。そのためには国労が全力をあげて闘えるために、国労に対する共闘の支えがなければなりません。

CO協定破棄を許さない裁判闘争

三池CO被災者の会は、勝利判決後もこれを土台に五項目の要求（責任追及をしかけて）

三井資本に対し抗議行動を続けてきています。昨年七月CO協定の円満解決と言ってCO協定の廃止を口頭で提案していた三井資本は、今年二月十五日、CO患者と遺族の切り捨てを狙うCO協定の破棄を提案してきました。提案の内容は、

- 一、CO遺族を今年九月までに転居させる。
- 二、熊大病院に入院の受川さんのCO患者取り扱い扱いを打ち切る。
- 三、入院患者の試験外泊の会社送迎の廃止。
- 四、CO患者訓練作業所の廃止。

五、昭和四十二年一月十二日付けのCO協定を三月末をもって廃止する。

このような三井資本の提案は、三池炭鉱の閉山を盾に「三池大災害の生き証人」であるCO患者・遺族の切り捨てをおこなうことでこれまでのすべての責任を白紙にしていこうというものであり、絶対許せない攻撃であります。

共闘の拡大を恐れる日本独占資本

三井資本の攻撃の本質は、CO協定破棄だけでなく大きな狙いは、CO患者・遺族を抹殺することによって三池における闘いを終えんさせ、人間らしく働き続け生き続ける闘いの拡大と、共闘の発展をおそれた日本独占資本の階級的攻撃であることを確認しなければなりません。

つまり、利潤追求のためには労働者を平気で殺し、傷つけていくという合理化を進めていくための攻撃であり、そういう意味で、このCO協定破棄は絶対許せないものであり、闘う以外に生き続けられない問題であります。これまで現地における鉱山への抗議行動をはじめ、三井鉱山本店への抗議を継続してきていますが、この攻撃を許せば、協定破棄のあとには必ず労災法を盾に、妻や子供の顔さえわからないCO患者の治療の打ち切りや、障害年金の見直しなどの攻撃がかけられてくるのは必至です。

したがって、これまでの闘いを充分に検証し、被災者の会の団結を強め、全国共闘の間と共に闘い続け、CO被災者の抹殺を許さないための具体的闘いと、裁判闘争（福岡地裁へ十一月七日訴訟）との闘いを結合させ闘っていくことを意思統一し確認したところです。最後になりましたが全国の仲間みなさんのこれまで以上の御指導と御支援をお願い致します。

（三池CO現地共闘会議事務局

宮崎 勝）

◇編集部だより◇

▽「朝日」一九日付に厚生省事務次官が老人医療機関から一千五百万円のゴルフ会員権、車の便宜供与を受けていたとの特ダネが掲載されている。泉井スキヤンダルは別稿の通り。汚職、腐敗ばかりがつづく「正・財・官」だ。住友商事の元課長は二千六百億円余を投機でスツたというのだから。

▽マスコミの腐敗ぶりもひどい。マッチポンプのように世論をあおり、「正・財・官」の茶坊主に紙面、電波を提供する。そしてちっとも責任をとろうとしない。

▽ある研究会に参加を申し込んだ。テーマは介護保険。主催者はフランスベッ、研究会場は東京海上火災、出席者は厚生省のお役人ら。ここに、「介護保険」の目論見は明白だ。

▽いつものお願い。資料よろしく、投稿も。「通信」読者をご紹介ください。

橋本行革は最悪の反動路線

—反合理化闘争の再構築を—

オール保守とスキャンダル

財界・大企業のめざしている政治構造は、保守党（今は自民党）の一元支配体制であることはいうまでもない。それも安定度が強ければ強いほどいいわけで、その意味では今度の選挙での自民党の過半数割れ、少数与党の橋本単独内閣については満足していない。しかし新社会党と共産党を除けば、オール保守体制であることには間違いなく、橋本内閣が政治折衝を誤まらず、かつての「国対政治」のように、気配り金配り（自民の国対費と官房長官の差配する機密費）を上手にやれば事実上野党は存在しない状況となっている。例えば「消費税引上げ」では、社民、さきがけが賛同しているだけではなく民主党も積極的協力である。行革では社民党は、N T T分割や郵政民営化で悩んだり右往左往することになろうが、新進党と民主党は行革推進の立場である。橋本内閣にとってこんな良い条件の政治環境はあるまいと思うほどだ。

さらに野党としての重要な任務に「チェック機能」があるがそれをどこまでやれるか。新進党、民主党共に半分以上任務放棄の形である。例えばチェック機能の第一といってもよいのが、汚職・疑獄の追及である。しかし今度の脱税容疑で逮捕された泉井純一・石油卸業者は、新進、民主両党関係者に献金を行っており（自民党は山崎拓政調会長、小泉純一郎厚生相らへ）、新進党は副議長になったばかりの渡部恒三氏（旧自民・田中派）、民主党は井上一成元郵政相（旧社民党）等の名が出でている。新進党は「オレンジ共済組合」の友部達夫参院議員への疑惑で自民攻撃の出鼻をくじかれた格好である。自民党は行革を推進することで、自民党への汚職・腐敗の疑惑にフタをしようとしている。追及する野党が自らもキズをもっているため、表面をなでるだけの追及に終わることで、都合よくオール保守体制は生かされている。

行革は財界の主張

橋本内閣の行政改革はまず十一月十九日に「行革推進会議」を発足させ首相が会長となる。この会議は十一人の委員で構成するが、中心は豊田経団連会長をはじめとする財界のメンバーである。学者や労組代表というのは当然イエスマンをそろえている。事務局に中堅官僚を集め各省庁とのパイプ役を務めさせる。官僚OBを入れないと宣伝してきた手前上今度は事務局にした。事実は政・財・官のユチャクそのものの構成である。

行革会議は一年内に省庁再編について結論を出し、首相は九八年一月開会の予算国会で法案を成立させたい意向だ。九七年（明年）の通常・予算国会で大蔵省改革法案先行させて成立させたいとしている。

今回の総選挙で保守各党は、消費税や沖縄を争点にしないために行革と財政再建をスローガンにしたが、そのなかで中央省庁を半分にするとか大蔵省を解体するとか大風呂敷の宣伝があった。その点からみると今後の行革は公約違反が多くなることは間違いないが、ただ今までと少し違うのは、少なくとも橋本政府と財界は本気だということである。もち

ろん本気だからといって実現するとは限らないが、今回の行革は日本の支配層である財界・大資本が自らの生き残り（多国籍企業の国際競争に勝つために）を賭けている。

「いま、政府・財界の至上課題は、メガコンペティション（世界大競争）に勝ち抜くことである。日本の大企業は八〇年代、ME合理化により『ジャパン・アズ・ナンバーワン』といわれるほど急成長を続けてきた。それがいま、アメリカに追い抜かれ、NIES、ASEANの急迫を受けている。この危機を乗り切るため『日本の全社会構造の一大転換は必至である。このことに失敗すれば、二十一世紀に向かって日本の未来はない』というのである。（『新社会』第三四号）」と坂牛哲郎氏（新社会党理論委員）は指摘している。

財界主導の行政改革はかねてから革新の側が言ってきた「体制的合理化」の本格化である。橋本内閣の性格は、明らかに「新保守主義」である。サッチャー、レーガン、中曽根が前回の世界的不況の際に政治・経済路線として持ち込んだ反動的支配理念である。橋本政府は財界と一体となって新保守主義の「今日版」を着々とオール保守体制を利用して進めている。

橋本首相が大蔵省改革と省庁再編案を急ぐのは、明年九月には、再び自民党総裁選が控えているからである。行革の進行を自民党総裁再選のテコとするつもりだと一部大新聞にいわれている。さらに「金融システム改革」、「経済構造改革」、「社会保障改革」、「財政構造改革」（財政再建・赤字国債のこと）と合計五つの改革を並べている。改革、改革で耳ざわりのよい言葉ばかりだが、橋本首相のいう改革は勤労国民のためになるのか、となればサッチャー、レーガンの実績をみればよい。

日本では中曽根政治を総括すればよいのである。これらの新保守主義の軌跡には、抵抗する労働組合は潰され、福祉は全て個人負担増となり、中小零細商工業者は倒産させられ、失業者は続出することである。今回の橋本行革は急いでいるように見えてやり方は柔軟でもある。しかし反行革のたたかいを行う労働組合や政党は極めて少ない。そのため国会さえ法案が通過すれば何でもやれるという考えが政府と首相にはある。

われわれの進路

それではどうするか。第一に、行革は現代資本主義の矛盾の表現である。したがって行革によって生活や権利、失業などが生ずることになれば、いろいろな力を合わせてたたかうことである。たたかいもいろいろな方法がある。新社会党やたたかう労組とともに立ち上がることである。

第二に、すでに表面化している消費税、沖縄、介護をはじめとする福祉の切り捨てなどに対して反対共同の戦線を構築することである。マスコミも当初は政府側であろうが、反対側の世論が高まれば批判的立場に少しは変わってゆくであろう。政府案の矛盾点や勤労者イジメ、増税の中味などを大々的に宣伝（チラシ、街宣、座談会、小学習会など）を繰り広げることであろう。そして大衆の組織化をはかるうではないか。

新社会党は、党建設と結合して労働運動の再建も含めて大衆の運動を徹底的に闘うとき前進できる。

（政権研究班）

「下から」運動づくり、全階層に切り込む

— 総選挙総括と新社会党の進路(下) —

座談会のつづきを掲載する。今回は結果を中心に論議した。今回は新社会党はどうすべきかに焦点をあわせて討論した。他、各地の仲間の総選挙をたたかつてのレポートを報告する。参照していただければ幸いです。
(編集部)

新進伸びず自民一安心

司会 結果をどうみるか。まず数について。

上野 自民は解散の時期を誤った。遅すぎた。過半数とれた。選挙制度は自民党に圧倒的に有利だ。さらに沖縄、景気、新進はガタガタしてた。橋本はそれを狙ったのだろうか、情勢のヨミが甘かったのではないか。

新進は予想どおり。だって内部はガタガタだもの。これから自民に揺さぶられる。

司会 社民党はどうか。

上野 とりすぎたくらいだ。小選挙区の四はできすぎだ。自民党が配慮した。とくに大分でね。村山さんは「身を殺して仁をなした人」てんだろう。

司会 土井効果はあったのか。

上野 女性票は多少入ったと思う。さきの川柳じゃないが全般的には「ダメなものやほりダメだったかおたかさん」てところじゃないか。それでも比例区一―二名上乗せする効果はあった。「土井効果」といわれるものじゃない。

司会 民主党には風が吹かなかった。

上野 そうだ。日本新党の時とは情勢がぜんぜん違う。あの時は自民が崩れ、「新しい政治が始まる」のではとの期待感があった。しかし細川いらいの連立政権で政治不信は天をも突く勢いとなり、その中で地力のある自民党が旧社会党の自滅と相まって、立ち直りつつあった。一方で過半数の勢いといわれてたほどだから、民主党に風が吹くわけない。現状維持までいったのは「マスコミの効果」だった。とにかく支援がすごかった。

今村 日本新党のときは、民間政治臨調が表にでて、細川のバカ殿の回りに新しい連中をかっついだ。政治的にも今、上野さんがいわれた「自民に代わる」「新しい」政党への期待もあった。

今度違う。カビのはえたような連中がバッチのためにより集まった。赤松君や山花君のようなね。マスコミは本気で持ち上げようがなかった。

上野 持ち上げたのは鳩山兄弟と菅だよ。しかもEDTみたいな人と選挙のたびに所属政党変えてる人がなんでいいのかね。どちらも旧田中派だ。

司会 自民党の長老連中も鳩山兄弟が「なんで民主党・リベラルなのか」と笑っている。

上野 民主党も解体だな。だって鳩山のような金持と旧社会党の貧乏人ではうまくいくわけない。旧社会党支持組合は民主を支援したけど、民主の中心政策は「行革」なんだからここにも矛盾がある。

司会 自民党のホンネはどうなの。

今村 ホンネは過半数とりたかったけど、ホドホドの勝利というところ。一樣に新進が伸びなくてホツとしている。もし新進が自民と接近していると、小沢君流のラディカルなやり方と自民党の柔構造的なやり方のあつれきが強まり、国民世論が二分される。たとえば「改憲」問題なんかで。

さらに投票率について長老連中はかなり危機感もっている。これまでの「支持なし」は三〇%前後だった。今では五〇%を超えた。この五〇%が一举に動けば政治はさらに不安定さを増すとの認識だ。そういう意味で、「体制の危機」ととらえる連中もいる。

司会 共産党は。

坂牛 バブルじゃないか。去年の参院選が三八七万票、今回は七二六万票で倍増している。今が最高じゃないか。それにしても小選挙区比例並立制度はうまくできている。ブロック比例代表だと二六になり、全面的な比例代表だと、六四になるわけだから。本当に悪制で民意を反映しない。

上野 新社会党はやはり不足力だった。

共産だけでは野党は力不足

司会 これから各党はどうなる。

上野 再編成でいわれるが、小党の再編成であり大元の自民党は揺らいでいない。新進党との一党体制をめざし、そのために再編成という名で小党のかき回しがおこなわれている。

坂牛 自民党は小党を吸収し膨脹する。他は縮小し一か二分の一体制になる。

上野 二大政党は最初から考えられない。だって、政策的にぜんぜん違いがない。この間の政治の流れは「反自民」「反小沢」で政策をめぐるものじゃない。

学者は「小選挙区で二大政党になると事務方は考えたのだろうが、そうはならなかったのが今度の結果」とごくらくトンボみたいなのをいつている。事務方は政治家以上に政治家でね。今度の結果は折り込み済みだ。

今村 腰を据えた野党じゃない。ふみにじられた者の利益を代弁するのが野党なんだろうけど。民主や新進は絶対そうなれない。小沢君はまさに権力者で、野党の党首じゃない。もし彼が野党を本気で考え、政権奪取を考える能力があれば、消費税率を将来一〇%にするなんていわない。そうしておいて、総選挙さなかに三%に凍結するってんだから。民主党だって同じで、最初から五%賛成。票は入るわけない。反対の人は共産党を入れたと思う。「バブル」との表現もあったが、票を倍増させる条件はあった。

自民「復調」の原因

司会 これからの政治のゆくえとも関係するが、自民党の支持基盤をどうみるか。

坂牛 なかなか崩れない。自民党は全国万べんなく当選者を出している。これまで都市部で弱いといわれたが、東京五六%、東海四四・一%、近畿二七・七%だ。新進がとっているのは東海四七・一%、近畿五九・六%だけで、自民が圧倒している。これを見るかぎり、新進は地域政党で全国政党じゃない。全国政党は自民だけとなる。他に共産党はまんべんなくとっているが、小選挙区では大部分が死票とされるし、社民党はまんべんなくダメになった。目下のところ全国的にあらゆる階層を代表しているのが自民と共産だけだ。それ

以外は地域ローカル政党だ。民主は北海道三八・五%と東京一六%、あとはダメ。

問題は自民がこれから切り捨てられるすべての階層の支持を受けていることなんだ。たとえば農民、中小零細企業、それに九〇%をしめる労働者。なんでこんな変なことになちゃたのかね。

司会 いまおしゃったことは今回の選挙をみるかぎりそうだ。しかし、農村地域が貢献している。議席率でいえば中国九〇・五%、四国七四・九%、北陸信越七〇・〇%、北関東六四・五%、南関東六五・六%という具合で、都市部と農村部のかいりはすごい。プロック制の小選挙区の得票率では五〇%を超えるのが中国と四国、四〇%超が東北、九州、北関東、あとは三〇%台で東京三〇・二%、近畿三二・〇七%にすぎないのも事実だ。

今村 旧社会党の責任がやはり大きい。八九年の「ヤマが動いた」選挙では消費税、コメ、スキヤンダル、規制緩和等が旧来の厚い自民支持基盤を直撃した。世界的な経済構造の変化で自民に財界の考えがストリートに反映した背景があった。この傾向はつづかざるをえないのだから、旧社会党は「弱者」の利益を積極的に訴えるべきだが、すでに論議したように、「やりません」といったことをやっちゃって、まんべんなく支持率を落とした。だから、「切り捨てられる」と分かっていても、他にたよれる政党がないからこれまでの人間関係、利益関係が再び作用し始めたということではないか。

司会 私は一時的、過渡的現象だと思う。歴史的激動期にはよくあることで、それを固定化すべきじゃない。都市と農村、「もてる者」と「もたざる者」の対立は深くなる。問題はそれを代弁する政治勢力の形成いかんだ。

地方を歩いていると過疎化はたいへん。これまで安い労働力を目当てに建設された大企業の工場も羽がはえたように海外にとんでる。補助金行政以外に生きる道ないのが現状で、今度の選挙でその傾向が一举に出た。まだこれから変わるんじゃないか。

上野 それは逆じゃないか。

坂牛 そこは大いに議論すべき所だ。海外の論評をみると「規制緩和やらない自民が勝った」というんだ。ところが財界は大競争で、多国籍化をおし進めざるをえない。競争に負けちゃうから。だから、自民といえども規制緩和をやらざるをえない。自民にとって幸運だったのは、村山のおかげで支持基盤を失わずにすんだことで、全階層で構成されている。自民の支持基盤はいわば「柔構造」で、ラジカルにやるといったのが小沢だった。独占の利益をストリートに実行する小沢がつぶれた。自民の体質はソフトランディングなんだ。ゆるやかにいく。連立政権下に顕著だったが、自らが傷を負わないように切っていく。切り方がラジカルじゃないんだ。めんどろなところだよ、そこは。

そうやっていく中で政治不信は強まるし、何よりも宣伝、教育できる。世論を誘導できる。消費税についてもその傾向が出てる。ラジカルにやるより危険なことだと思う。ラジカルにやってくればわれわれも対抗できる。ところが時間をかけてつぶしにくる。その間に政治意識はどんどん後退していくしね。自民党てのはたいへんな政党との印象だな。これつぶれないよ。

原 つぶさなさいかんのに。

坂牛 それほどやっかいな政党だっていうことだよ。財界、官僚、業界組織をつかみ、それに個人後援会だろう。都市政党への脱皮が今の自民党の課題なんじゃない。

原 よってたかつて、自民に協力したのが連立政権時代の政党の姿だった。

上野 財界、官僚、業界代表と構造的に結合している。支配層をまっぴらなく固めてるのが自民党なんだ。矛盾は出るんだ。だけど、おだてたりすかしたり、おどかしたりして調整してゆく。官僚の中にも対立があるけれど、それをうまく利用しますから。

有権者はモノ取り主義に流れる。沖縄でもそんな面がみられるよね。そこまで政治意識が後退させられてるんだ。政治不信で誰が得をするかといえば自民党だ。怒りをもつていく場がなくなるわけだ。それをマスコミがつくり出している。やっかいな時代だと思う。それをどう打ち破るか、楽しみは多いと思うよ。

「改憲」問題は新たな段階に

司会 今年は「平和憲法」公布五〇周年だ。総選挙の結果、広い意味での「改憲勢力」は自民三三九、新進一五六、民主五二、さきがけ二、民改連一、無所属九のじつに四五九議席で、衆院議席数の九割を超えた。社民党も実体「解釈改憲論」に転落しているから、真の意味での「護憲勢力」は共産党の二六議席だけ。これからの憲法動向をどうみるか。

今村 「読売」十月八日付の「憲法21世紀の課題」識者アンケート」調査結果がよく示している。憲法学者は改憲反対論が多いから、これからは憲法論議に憲法学者以外の有識者・国民を参加させ、改憲包囲網をつくる準備にはいることだ。まず憲法論議は定着したとし、その上で憲法学者と一般有識者・国民との「落差」を強調している。憲法学者の六四%が改正に反対なのに、一般有識者・国民は五七%が改正に賛成で、そこに大きな「落差」があるというものだ。

坂牛 一般有識者って？

今村 憲法学者以外の学者・文化人のことじゃないか。

司会 最近『憲法改正論——21世紀の繁栄のために』と題する本を読んだ。出版元はPHP、著者は吉田和男氏、この人物は現在、京大経済学部教授だが、大蔵省に入り主計局主査を歴任したあと、大阪大学教授を経て現職にある。専門は財政・金融論と思われるが、ありとあらゆる分野に首を突っ込んでいいる。こうした人物を頭に入れているのではないか。

坂牛 吉田って人はどう言っているの。

司会 中選挙区下では改憲のは発議はほとんど実行不可能だった。小選挙区制成立で憲法改正の可能性を開いた。二大政党制となっても、一党で三分の二以上獲得するのは難しく、改憲は大連合、まさに翼賛的結合がなければ成立しない、と。

上野 改憲包囲網づくりの世論づくりに、いよいよ具体的な一歩を踏み出したことだ。国労、社会党包囲網づくりに「国賊論」が横行した。小選挙区制を論議した国会でも反対議員は「国賊」といわんばかりだったから、中曽根ですら、「いまの憲法では不足」といっているが、オールドな改憲論から、「国民的広場、大掛かりな臨時調査会」で論議し、国民的討論の経過が大事で、改正の内容まで前提に議論する必要はないとの姿勢だ。さきの吉田氏の大連合、翼賛的結合とつながる。

後藤田（正晴）も何かしゃべったんじゃないか。

今村 「朝日」の十月三二日付だ。「護憲の旗頭」にイメージを変えたのかとの質問に、「護憲」ねえ。ちよつと違う。世の中の変化に合わせた必要最小限の改正はせざるをえない。すぐにはというわけではないが」と答えている。

上野 社会党を壊しての余裕だ。共産党は議席を大幅に伸ばした。しかし旧社会党がもつ

た反自民票結集の力はない。

原 社会党の長期低落がいわれた七〇年代以降も、社・共で一五〇前後の議席があった。憲法公布五〇年、変わったですよね。

上野 これからだ。いまの政治状況まだ固まらない。揺れるよ。それはあとの議論だろうけど。

「行革」を逆手にとる

司会 自民の組織は柔構造だ。どうこの「柔構造」をつぶしてゆくに議論をしほりたい。

坂牛 自民党はあらゆる階層をすべてに支配層にとりこんでいる。調整するんだ。だから独占の要求だけで一直線に進まない。だから分けの分らんうちにヤラちゃうことになる。

上野 さらに具合い悪くなればトップを取りかえちゃう。柔構造なんだよね。

坂牛 自民は独占や外国のいうとおりにならない。自分の組織が大切だから守る。新進党は「普通の国」をつくるために自民から出た、ラジカルにやろうとしたグループがつぶされた形にいまはなっている。

今村 地方にいれば行政組織そのものが自民党だ。

上野 北海道で民主が勝ったのは、まさに今いわれたことだ。横路、自治労、そして道庁の役人組織。背後に補助金なしにはやってゆけない地方自治の姿がある。逆らえないんだ。行革を逆手にとってどれだけ切り込めるかを考えることも重要だ。むこうの構造をこわせるかどうか。力は足りないから短期にうまくやれるわけではないんで、長期的にどうするか、と。

坂牛 日本はやっかいだ。ヨーロッパやアメリカは二大政党が、それぞれに哲学をもっている。ところが日本は「軟体物」にとりこまれていて。労働組合はこのままでいけば全面崩壊になる。とくに民主党は労働組合をつぶすのに有効になる。現に有効な働きをしたし、これからも出てくる。

司会 ポイントは何を基盤に自民党の「一党支配構造」を破っていくかだが。

今村 片方に共産党がいる。共産党は伸びないだろうが、自民に対立する政党だということとを浸透させた。さきにどなたかが「バブルじゃないか」といわれたが、比例で「共産党」と七百万人以上に書かせたことは無視できない。

その中で新社会党が何を基盤に影響力を拡大していくか。共産党の票はよほど馬鹿なことをしない限り減らない。われわれが共産党の上に行く方法は、共産党とはちがう別の層を獲得することだ。しかしこれはやっかいだ。新社会党にたいし「あなた方より大きい共産党がある。共産党でどうしていけない」といわれるとネ。それを運動の中で「やはり新社会党だ」という方向にもっていくには相当の運動が必要だ。

坂牛 労働組合自体が体質を改善しないと、官公労系の組合は共産党系にくわれていくしね。

司会 原さん、新社会党は総選挙直前の狛江市長選、足立区長選で共産党と共闘されたが。

原 とにかく自民をやっつける、そして「護憲の政治勢力」を少しでもふやすことが必要だ。

司会 新聞やテレビでは「共産・新社会推せん候補当選」と報じたが、共産党の公式見解は「新社会党」についていっさいふれない。「大きな党」は共産党だけとの主張で、戦友としてスクラムくんではないという気はみられない。

坂牛 わが党の独自性をどう出すか。敵は自民党と多国籍化した大企業だ。その自民党はさきほどの来論議されているように柔構造だ。

上野 行革だつてガチガチやらない。自治体は自分たちの手足だから。それを壊すことはできない。そうはいっても矛盾はあらわれるんだから、われわれは「反独占・反自民」でまともな運動を構築していく他ない。

共産党というけどね、消費税反対のチラシにせよ、街宣にせよ、わが方がやった方がよく理解してくれるんだ。量的、質的に共産党をどうしのぐかだ。

原 けつさくなことがありました。選挙中に「なぜ新社会の機関紙は共産党のことを書かないか」と、三〇四日電話が集中したことがあった。

今村 政党の機関紙が己の党の政策を書くのは当たり前。「赤旗」などは他の党をほめたことがないのね。

次への布石を考える

司会 自民が「柔構造」の体質をもつことはよく分かった。しかし、財界の意をくむかぎり、「弱いもの」への犠牲の転嫁は拡大するわけで、これからの矛盾はどうあらわれてくるのか。

原 一つは安保・沖縄、有事立法整備で憲法にせまってくる。このところで共産党だけでは広まりをつくれな。たとえ新社会党が国会議員の数は少なくとも前面に出てやる。

上野 まず意識改革、小党からの出発であることを頭において始めることだ。その上で苦勞は多いがいろんなことや、広い人たちとのつながりをつくることだ。矛盾が出てるところでわが方の組織化をやることだと思ふ。

原 共産党との共闘は七〇年代のフランスの社会党の例にもあったように、やるべきだと思う。

上野 主体もてる人がいればね。

原 兵庫みたいなところわね。

坂牛 労働組合運動でいえば共産党はガラしない。現場の声を反映しないから。だから、労働組合レベルでは原則をしつかりし、左からたたく。そうすれば必ず勝てる。労働組合を一から作り直す気概をもって臨めば、新社会党の前途は洋々だ。

今村 共産党は労働組合を犠牲にして票を集める傾向になっている。大衆迎合です。こちらがしつかりやれば勝てると思いますね。彼らは職場では権力とぶつからせませんから。下からモノをみて、下の声を押し上げることだと思ひます。

上野 北海道で新社会党をやった同志がうまいこといつていた。うちの市で八百、隣の市で二千でた。この票は地方議会選に十分届く票だ小選挙区では候補はおらず比例区だけでこれだけ出せたことは大成功。この票を基盤に次の地方議会選挙をめざしますって。

坂牛 下から議員をつくる、そのため街宣やるチラシ配る、宣伝物も出す。そしてあらゆる層にはいること。兵庫は経験豊かだから、その教訓をはっきり出してほしい。

上野 小党が伸びるためには「下から」運動をつくる他ないんだから。

原 私どもも次の布石を考え、今度の選挙をたたかった。その成果を自治体、参議院選につなげたい。

◇総選挙をたたかつて◇

国民が政治の手術を 入院していた十一日の昼頃の事「食事ですよ」と声がかかった。患者にとって食事は一番楽しいときである。食事をしながらの会話は又楽しい。自然に選挙が話題となった。熊本にあるこの病院は選挙区は一区であった。おばあちゃんがいった「田中庄一は落選するばい」。隣のばあちゃんがうなづきながら「そうくさい。以前はわたしらのことを考えてくれたばってん、この頃は消費税ば五%に上げることに賛成げな。落ちて当然たい。働く者の味方じゃあなかけん」。私は楽しくなつてつぎのようにいった「そうですよ。わたし達を裏切つて自民党と同じような民主党にいく人だから。福岡県でも同じような候補者がいますばい。自分の当選のためには今まで多くの世話になつていたのに、空き缶でも捨てるようにばいと捨て、保守党に鞍がえする人は人間失格ですよ。信念のない政治家は国民の信頼を失い落選するのは天の声ですばい」。ほんとという声が起こり、食事は一段とにぎわつた。私は手術の夜、じわつと眼帯を明けた。すると電気がまぶしく光つてひさしぶりに正常な眼で部屋と人の顔を見た。嬉しさがこみあげてきた。黒色のズボンを買つたが実は紺色であつた。新社会党が大きくなって、国民が本当の政治が見えるように、手術ができればと思つた。

(大牟田・M)

爽やかに六千六百九十一票 ほんとにお疲れさまでした。金もない、人手もない、時間もない、ないない尽くし、あるのはとにかく頑張ろうという気持ちだけという闘いでした。党結成から半年、国会解散前日の出馬表明と、知名度も低く、出遅れの中で、六六九一人の方が投票して下さつたことに「まだ間に合うかもしれない」―五〇年前を繰り返さない―と勇気づけられました。うそもごま化しも必要ない、言いたいことが主張できる爽やかな選挙でした。近畿でも、全国的にも大変厳しい結果となりました。大政党に有利な小選挙区制の弊害は大きかつたと思います。全国で九四万人の方々が新社会党に一票を投じて下さつた(完全比例制なら九議席分の得票となる)ことに勇気を持つて、選挙でできたつなかりを大事にして、あり方を総括しつつ、党建設、党勢拡大に前進していきましよう。♡個人演説会で。「その皆さん、どうか土井さんのようにならないでください。」

♡スポットで。仕事中の女性が駆け寄つてきて「公約やぶらんといて。応援しているからね。」♡例の、知る人ぞ知る赤毛(茶髪なんてもんじゃない)の男の子。最終日、事務所の前で「おばちゃん(そのだのことだ)いてへんの?」と、そのだの帰りを待つていてくれた。そして、そのだが帰つてくると握手をしてさつと夜の巷へ。なんでもいいけど、しっかりと生きていけよと心の中でつぶやくそのだであつた。

♡駅頭で。こーこーせーの女の子。「私もゆうこつていうんです。頑張つて下さい。」と握手を求めてくる。どうでもいいけど、しっかりと生きていけよと心の中で叫ぶそのだであつた。

♡二〇日夜、事務所に電話をいただいた。「もつと時間があれば若い人にアピールできたのに。残念でしたね。でも、二七才になる息子が初めて投票に行きますすしたよ。」

♡もつとあるけどエピソードも終わり。さあ、これからがんばつていきましよう。明るく楽しく、元気に、ね。

(園田選対ニュース)

三百十一票を土台に せっかく支持をいただいたのに、前議席(二)を無くしてしまった。衆議院に新社会党の議席がない。厳しい結果である。大変残念である。新社会党を支持して(運動、カンパ、投票等を)いただいたみなさん!みなさんに心から感謝し、こういう結果になつたことを深くおわびしたい。

一、新社会党に寄せられた票（比例区）は天理で三二一票（投票率一・二二％）、奈良県は六九二一票（一・〇六％）、全国では九六三四七一票（同一・七三％）であった。投票者の意志をより正確に反映する定数五〇〇の完全比例制なら、九人の議席を得られる票である。「小選挙区比例代表並立制」という非民主的な制度、ミニ政党に差別的なマスコミの扱い、特に護憲派を軽視（又は無視）してきたマスコミの扱いは民主主義の根幹にかかわる問題である。何としてもこのような国民の基本的な被選挙権を奪う非民主的な選挙制度を変えなければならない。

二、この票については、我々党としても厳しく反省しなければならない。社民党があまりにもあまりの変質ぶりだから、旧社会党支持者は我々新社会党を支持してくれるのではないかという甘い期待があった。また、小選挙区で候補者をたてられなかったため、比例区の運動の熱意が低下していた。働く者を中心とする市民の中に丁寧に訴えていく具体的な運動が弱かった、我々反省点はたくさんある。今後支持者と共に総括を深めたい。

三、天理市で寄せられた三二一票という支持者の期待は熱い。これを今後も発展させなければならぬ。全国的にすべての比例区で新社会党の存在を明らかにした。天理でも三一人が新社会党に期待をしてくれた。これを土台に必ず勝利の展望を開きたい。そのためには何としても党員の拡大、「新社会」の拡大、そして働く者の党として、当然・市民・労働者・労働組合の方々との結び付きを強め、市民運動、労働運動や平和運動を再建拡大していくために全力を挙げたい。地方議員もつくりたい。

四、戦後最低の投票率（五九・六五％）と「自民」、「新進」、「民主」の総保守（改憲勢力）の圧勝は極めて危険である。新社会党が訴えていたように、民主主義の危機、働く者・「弱者」の危機である。憲法制定五〇周年を迎えて、平和憲法の危機である。情勢はますます、護憲の党・働く者の党としての新社会党の任務を重くしている。党はまだスタートしたばかりである。しかし、この任務をはたすのは、正しい政策を持つ新社会党しかない。理論と実践の統一でこの任務をはたしたい。（天理・I）

若者の心をとらえる 総選挙闘争、残念な結果ですが、これが反動の時代に旗を上げたわれわれの現在の實力と見て、力を伸ばしてゆかねばなりません。しかも、若年層にのびていかねば未来はないわけです。我々の訴えが若者の心にヒットしなかったのには、それなりの理由があるはず。職場の若者から教えてもらわねばならないことが山ほどあるはず。

それらを持ち寄って交流することからが、再出発のはじまりではないでしょうか。そして、地方選で伸びることです。もう一方では、全ての県に県本部を作り、全ての県で小選挙区、ブロック比例制の違憲訴訟をおこしてゆかねばならないと思います。少数排除、死票の激増、国民の立候補権制限の高額供託金、政党要件の新規参入者排除：大衆的盛り上がりをつくり出す中核に新社会党が見えてこなければ、現今の包囲をつきやぶることはきわめてむづかしいと思います。（自治労・F）

党組織建設に芽 初めての小選挙区制選挙は、懸念されたように極めて非民主的な結果となりました。自民党は、小選挙区で三八％の得票率で五六％の議席を得、全体でも三分の一強の得票で議席の四八％を得ています。共産党の小選挙区は九九％が死票に、新社会党は小選挙区・比例区ともすべて死票となりました。

新潟の闘いは残念ながら稲村委員長長の当選を勝ち取ることができず、供託金も没収になりました。しかし、結成半年の選挙にもかかわらず、ブロックで五万票、全国で九六万票（一・七三％）を獲得できました（全国一本の比例区であれば、三十四名の当選が可能です）。この数字は大変厳しい中にも、次の参議院選挙で比例区の議席獲得と二％条項の突

破の可能性が大いにあることを証明しました。また、二区の同志の献身的な努力や北信越に党組織建設の芽も生まれました。

(新渴・K)

労組と選挙、政党支持 昨日おこなわれた衆議院議員選挙で期待の池本柳次候補は議席を確保することができなかった。前回の総選挙から三年三カ月の間、十勝の代表となるべく労働者はもとより、農民、漁民、商工業者との対話を重ねた上での再挑戦だけに非常に残念である。候補としての政策づくりも「十勝の思いを引き受けます」と有権者との対話、要望の中から作ってきた。しかし今回の得票は前回を大きく上回ることは出来なかった。選挙前に発足した民主党への新風が吹かずに終わった。前回選挙後のめまぐるしく替わる、政権交代劇に有権者はあきあきしたのか、国民は自民党の政権復帰を容認した結果である。政権与党の道を選んだ旧社会党は結局、社民党、民主党、新社会党、改革と四分五裂の状態になって仕舞った▼かつて「総評・社会党ブロック」と呼ばれ多くの勤労国民の支持を受けた日本社会党と総評系労働組合との支持協力関係も終焉したと言ってもいいだろう。地区労や全道労協などのローカルセンターの方針に合わせ、加盟組合も決まった政党を支持支援するということもなくなるのではないか。これからは有権者個々が、あるいは各々の労働組合が支持政党なり、候補者をキチンと責任を持って選択しなければならない時代になったともいえる▼今回の投票率は極めて低い結果となった。政治不信、政党不信の気持ちから棄権が多くなることも理解できなくはない。投票という国民としての義務と権利を放棄すればするほどそのツケは大きくなるだろう。政治とは何かが国民に問われている。

(協病労組帯広支部「みんな」)

狸に化かされた総選挙 初めて行われた「小選挙区制比例代表並立制」の衆議院議員選挙もふたを開けてみれば、自民党の思惑どおり、保守の圧勝、しかし、この選挙制度がいかにも非民主的で公正さを否定した選挙制度であるかは、政党間の惜敗率の有りかた、小選挙区で議員等質を問われた者が比例で当選するという結果をみても歴然としています。国民にとっては狸にでも化かされたような選挙だったのではないのでしょうか。政策は行革、消費税のみで、沖縄問題や住専処理など口をつぐんだまま、これは旧社会党の責任である。いまこそ次ぎに向けて新社会党の基盤をひろげよう。

(名寄)

総括の徹底を 兵庫の小選挙区には、三期目をめざした三区の岡崎ひろみ候補をはじめ、一区・上野恵司、八区・小西純一郎、一〇区・中西裕三の四氏が立候補、近畿ブロックの比例区には岡崎、上野両氏と大阪の柏本氏、京都の園田氏の四氏が立候補し、たたかひの先頭に立って奮闘したが、いずれも議席獲得には至らなかった。

「発足から半年で党名が知られていなかった」「準備不足や人的・資金的な不備」など、敗因としてさまざまな指摘があるが、問題は、「どのように大衆に依拠し、どのように支持拡大が図られてきたか」が検証され、今後「どのように繋いでいくのか」が導き出されなければならない。

すでに、総括討論が各地で取り組まれているが、「職場での取り組みが不十分だった」「ビラ一枚配るにも、声かけなど、どれだけ努力されたか」「負けたショックはあるが、初めての自前の選挙であり、こんなに楽しい選挙ははじめてだった。一緒に頑張った仲間に入党を呼びかけている。」「黨員・機関誌の拡大に取り組もう」「早く自治体選挙の候補者を決めよう」など、さまざまな声が寄せられており、さらに総括を徹底し、次の一步を踏み出さなければならない。

当面、「憲法を考える兵庫集会」が二四日に予定されているが、同様の「憲法五〇年」運動を全県下で取り組むことが提起されている。

(兵庫)